

中華民国(台湾)からみた文化大革命

——ビクター・ルイスと華ソ接近問題を例として—— 川島 真

はじめに

一九六六年に始まった文化大革命は、大陸反攻を国是としていた蒋介石率いる中華民国にとって、その大陸反攻の格好の好機に映ったにちがいない。⁽¹⁾ 蒋介石はその日記で「この時こそ『倒毛』(毛沢東を倒す)には最も容易な時」⁽²⁾ だとしていた。しかし、その蒋介石の大陸反攻を食い止めたのはアメリカであった。朝鮮戦争勃発後にアメリカは台湾海峡防衛を決めたが、それは中華民国による大陸反攻を支援するという意味ではなく、台湾海峡の現状を維持することであった。つまり、中華人民共和国の台湾「解放」を防ぐとともに、中華民国による大陸反攻をも防ぐというこ



とであった。⁽³⁾

このような状況の下で蒋介石はアメリカへの不信感を露わにしていた。その一九六八年の日記では日中戦争の歴史が回顧され、「当初アメリカは正義公理の盟主」だと思ったが、それから二七年を経て、「国敗れて家も己み、人民も塗炭の苦しみを味わっただけでなく、先人の墓骨も砕かれ、個人的にもこれまでにない侮辱を受けたが、さらにアメリカに欺され弄ばれ」、これ以上の恥辱はないとしている。そして次の一文が重要である。

これからは、アメリカに対して望みを託さず、別に炉烘をたて、自らを救い、また自立を図ろうと思う。これも決して行き過ぎではなからう。⁽⁴⁾

「別に炉烘をたて」というのは、中華人民共和国が建国さ

れた時に中国外交の方針として用いられた「別に竈を立てる」と同じことである。ここでは、以後、アメリカに頼らず、別の関係を築くということを意味する。

蒋介石はこの後、ソビエト連邦との接近を模索する。そして、ビクター・ルイスという人物が台北を訪問し、実際に初期的な交渉がもたれる。最終的に、この華(台)ソ接近が何かしらの結果を生んだわけではない。だが、台湾から文革を見る上では一つの興味深い事例であると思われる。このビクター・ルイスと台湾の関わりは、すでに少なからぬ研究者の関心を引きつけてきた。英語圏での代表的な研究としては、まずJohn Garverの一九七八年の論考がある。これは、ソ連と中華民国の双方が互いにきわめて現実主義的なアプローチをとったものとして評価し、「曖昧なパートナーシップ」(Ambiguous Partnership)を形成したと評価した。Michael Shareの二〇〇三年の論考は、比較的長期的なスパンでイデオロギーの側面から分析を加え、華ソ接近をイデオロギー的な対立から不確かな友好関係へと移行したと指摘した。そして、Czeslaw Tubilewiczによる二〇〇五年の論考は、Shareを批判しつつ、中華民国はあくまでソ連接近をアメリカに対する「梃子」(Leverage)として利用したに過ぎないとして、「敵か友か」といった二分法に疑義を呈したのだった。しかし、当時の冷戦史研究の枠組みであった、理想主義的か、現実主

義的かという論点は横に置くとしても、これらの先行研究の多くは、アメリカやソ連の史料を用いていた。Garverが中華民国の文書を一部用いたものの不十分であり、また台湾におけるルイスの行動などについては、魏景蒙の日記を用いていたにすぎない。その後、公開された蒋介石日記などは用いられていなかったのである。筆者は蒋介石日記や台湾の新たに公開された外交文書などを用いて、この問題について二〇〇九年に報告した。

他方、蒋介石日記研究の第一人者として知られる楊天石は、二〇〇八年に『找尋真实的蒋介石——蒋介石日記解読』でこのルイスの案件を日記に基づいて記し、さらに二〇一〇年十月二十七日、人民日報『文史参考』雑誌社主催の「文史大講堂」第一回(於…北京大学百年講堂)においておこなった講演「告訴你所不知道的蒋介石」(あなたの知らない蒋介石について話そう)で、ルイスの訪台の件を日記に基づいて述べ、中国でも新たな知見が広く知られるようになった。楊はその後の講演内容を活字にもしている。

二〇〇九年の報告の際、筆者は楊の業績を踏まえて報告をおこなっておらず、後になってその内容の重複を知った。またその後、蒋介石日記を用いた英語、中国語の論考なども出ている。本稿では、このルイス案件の内容が必ずしも日本語で紹介されていないことにも鑑み、主に蒋介石日記や魏景蒙(王平)日記を用いて、「台湾から見た文化

大革命」を示す一事例として叙述したい。この案件は中華民國の行政機関が直接扱ったわけではなく、魏や蔣父子などによって進められたので、用いる史料としては、檔案よりも日記が有用だと考える。また、叙述に際しては、自ら二〇〇九年の報告内容を踏まえ、先行研究との重複をなるべく回避したい。

一 冷戦下の中華民国とソ連

冷戦下、中国は分断国家となり、北京に中華人民共和国政府があり台北に中華民国政府があつて、それぞれ中国政府であることを主張していた。当初は、イギリスやオランダの例にあるように、その片方と外交関係、いま一方と領事関係を有することがありえたが、次第に双方の政府の「一つの中国」政策が形成された¹¹⁾。朝鮮戦争で台湾海峡の「現状維持」が図られたことから明らかなように、両政府の対立は世界的な「冷戦」と深く結びついていた。前述のように、アメリカは中華民国の大陸反攻を支援してはおらず、一九五四年の米華相互防衛条約には金門、馬祖は含まれていない。しかし、それでも一九五四年、一九五八年の台湾海峡危機ではアメリカもそれに一定程度関与している。

冷戦下の中華民国は反共陣営の一員であり、ソ連と直接的な関わりを持ったことは決して多くない。一つの事例

は、一九五四年六月二十三日に中華民国がバシー海峡でソ連船籍のタンカー、「Tyape」号を拿捕した件である¹²⁾。一九五〇年代、台湾海峡を挟む兩岸関係が緊張する中で、中華民国が中華人民共和国の背後にいると考えられたソ連に「一矢報いた」ということは一定の意味を持った。無論、その後に、中ソ対立の進行過程で中ソ接近があるなど、中ソ、米中関係が変化すると、華ソ間の緊張が緩和したことは少なからぬ研究が指摘している通りである¹³⁾。

しかし、蔣介石日記はそれとはやや異なる示唆をあたえてくれる。一九五四年六月二十二日、日記には次のような記述がある¹⁴⁾。

ソ連のタンカーに対してそれを拿捕する命令をくだした。第七艦隊は、通常我々を支援するものの、最終的にはこれ（この拿捕＝筆者注。以下同）には加われな¹⁵⁾いと声明した。これは、アメリカ政府が命じて阻止したのである。そこで自分は独自に命令をくだし、予定していた計画に基づいて単独で拿捕する命令をくだした。たとえタンカーが武装して抵抗したとしても、戦闘をおこなう。これこそ、ソ連が十年来、匪（中国共産党）と物資を貿易してきたことに対して最初に勝ち取るものであり、ソ連の中国侵略に対して最初におこなう報復行動なのである。

ここで記されていることは、ソ連が中華人民共和国を支援

していることへの報復であり、同時にソ連が中国を侵略していることへの報復ということである。そしてアメリカの許可がなくてもその行為をおこなうということである。六月二十三日の日記では、「我が艦が発見したら、そのタンカー拿捕の命令を下し、その船上の機器を破壊して使用不能にしてから、高雄港に曳航する」としている¹⁵。実際、同船は六月二十四日に高雄港に曳航された。だが、蒋介石は月末に「ソ連はただアメリカにだけ抗議し、自分には船の返還を要求してこない」と日記に記している¹⁶。最終的に中華民国は乗組員を送還はしたが、タンカーは返還しなかった。

この案件をめぐる蒋介石日記の表現は、冷戦下での東西両陣営重視であるとか、イデオロギーに基づく思考ではなく、やはり中国共産党をソ連が支援しているということ、またソ連が中国を侵略しているという二点に求められている。ソ連では、この案件は映画化されるが(An Extraordinary Incident / Чрезвычайное происшествие)、それはイデオロギーに満ちているとされる。また、先行研究も、このタンカー拿捕は中華民国政府独自の行動としながらも、この船舶拿捕に関する事前調整が米中であったことや、この船舶に関する情報などがアメリカから与えられていることなどをもって、広い意味ではアメリカの影響下で生じたこととしている¹⁹。だが、国際政治のコンテキストや案件処理のプ

ロセスは別として、蒋介石の認識は中国における正統性、そして中国に対する侵略への抵抗という論理に基づいていた。こうした観点は一九五六年の『蘇俄在中国』にも継承されるのであろう。

二 文革期のソ連・中華民国の接近 ——ルイスの訪台——

一九六六年に文化大革命が始まると、蒋介石はこれを大陸反攻の絶好の機会と考えるが、アメリカは決してその大陸反攻を支援せず、また一九五四年とは異なり、側面支援さえもしようとはしなかった。文革以前の一九六四年の周恩来の訪ソ以降、すでにソ連の台湾接近が始まっていたとする論考もあるが、一九六六年五月十六日の「五一六通知」を経た一九六七年にはメキシコの陳質平を通じて、中華民国とソ連との接触も試みられていた。

ビクター・ルイスというソ連出身の、ロンドンの *The Evening News* の記者が中華民国側と接触したのは、東京においてである。一九六八年十月に駐日大使の陳之邁が行政院新聞局長の魏景蒙にこの人物が訪台を希望している旨が告げられる。この人物は、フルシチョフの英語通訳を務められていたことがある者で、一般にKGBの海外工作員だと目されている²⁰。

十月五日の「蒋介石日記」には「対ソ連問題を考慮する」とあり、十月十六日には以下のような興味深い記述がある。⁽²²⁾

もし、彼（ソ連）がモノを介して我々に接近してきているというのなら、そのモノを送る方法とルートはどのようなものか。まずはそれへの準備をおこなわねばならない。（甲）空輸して直接台湾に運ばれるのか。

（乙）海運で間接的に運ぶなら、その地点と航路。

（丙）直接海運。

これはソ連から大陸反攻の支援を受けることを想定したものとと思われる。そして、その翌日の十七日には、「某方面の提出している米華相互防衛条約（原文では「中美協防台澎問題」）の問題を予防すべく、次のように答えねばならない。これと中ソ友好同盟相互援助条約（原文では「匪俄共同防禦協定」）との性質は異なっている。共匪が大陸で消滅してから、当然自然に撤廃されるものである」などと記されている。⁽²³⁾ その週の週末に記した反省録には、本文の冒頭で引用した「これからは、アメリカに対して望みを託さず、別に炉烘をたて、自らを救い、また自立を図ろうと思う。これも決して行き過ぎではなからう」などと記されていたし、そこにはソ連業務に集中的に取り組む決意も記されていた。

十月二十二日、ルイスと魏景蒙が会見した。その模様を魏が国防部長であった蔣経国に報告し、それが蒋介石に報

告された。ここから後の数日の日記の内容は楊天石の研究にも引用されている。以下重複もあるが、経緯を記しておきたい。二十三日、蒋介石は日記で「経国からソ連人と景蒙との昨日の対話の経過と内容について直接報告を受けた。これこそソビエト共産党がこの密偵（原文「密探」）を派遣して視察をおこなうことの始まりだ」と述べ、さらに今日はずっとソ連の密使対策をしていたとも記していた。⁽²⁴⁾ 二十四日の日記にはこの密偵の意図についての分析が七点に亘って記されている。⁽²⁵⁾

甲…ソビエト共産党の政策については、ただ我が党（国民党）だけが中国を統一してよく、毛沢東の共産党には将来がない、ということだ。

乙…アメリカ、日本に対して警戒心を抱いており、もし日本が中国を侵略すればその半分以上を占領できるだろう、としている。また、我々が日本とともに毛沢東を攻めるならば、ソ連が華北を占領するとしている。

丙…その主たる目的は、経国と連絡することにある。

丁…大使級会談の実施。

戊…貿易通商の主張。

己…台湾の実情を觀察し、中国共産党の状況と我々の中国大陸での力について聞き出そうとしている。

庚…文物を台湾からソ連に運んで展覽に供すること、また記者をソ連に派遣することについての主張。

その意図は我が政府と公開できるかたちで急ぎ往来し、毛沢東の共産党との関係が断絶したり、毛沢東の共産党を威嚇することを惜しまず、中米関係（中華民国とアメリカの関係）を離間させることにある。

翌日の日記に蒋介石は、「昨日の午前にはソ連の密偵への応対と採るべき方針について考慮し、それらについて丁寧な指示をした」とある。蔣経国がそれに応じた対応をすることになったのだろう。その翌日にビクター・ルイスは、国防情報局の葉翔之局長と会談し、大使級会談の実施や大陸反攻時の支援について話し合っている。この日も蒋介石は「完全に対ソ、対米方針について研究し、他の業務ができなかった」としている。当のルイスはこの日台湾南部に向かっている。

「魏景蒙日記」によれば、十月二十六日に蔣経国、魏景蒙、葉翔之の三者が会議している。そこで定められた方針は以下のようなものであった。「一、中ソ関係の歴史は悠久だが関係が悪化したのはスターリンによる。第二次世界大戦に際して我々は協力したが、後にソ連は毛沢東を支持し、我々は不利な地位に置かれた。二、ソ連が恐れているのは毛沢東であって、欧米ではない。三、内在、外在的な関係により、台湾が三六〇度の転換をすることは大変困難だ。そのため、このことは静かに進める」。ここでの三六〇度というのは一八〇度のこと、全面転換してソ連と同

盟を結ぶようなことはできない、という意味であろう。

次いで、「四、我々はこの海島へと退いて守っており、中共からの脅威はきわめて大きい。このことは我々の生死に関わる。我々は毛沢東の滅亡を見たいので、我々とソ連は話をする事ができる。五、アメリカは近年ずっと中国（中華人民共和国）と接触している。アメリカは我々の大陸への反攻を望まず、むしろ我々と中共との談判を望んでいる。あなたは我々台湾の立場を知っているだろう。だからこそ、もし我々が大陸に戻るのなら、辺境問題はソ連の問題にはならない」と記されている。これは、毛沢東との敵対関係こそがソ連と中華民国とののりしろであることを示すとともに、もし中華民国が大陸に戻れば、ソ連との間で辺境問題について問題にしないということを示唆しているようにも読める。そのあととは原則論で、「一六、我々は三民主義を主張しており、他国を侵略しない。七、アメリカは我々にベトナム戦争への参加を望むが、我々は拒否した。我々は国際戦争に参加したくない。八、中共は我々の内部問題であって、だからこそ我々は強い関心を持っている。九、總統の三民主義と総理（孫文）のそれは同じである。孫総理の政策において、中ソ関係はアメリカとカナダとの関係のようであった」。

十月二十六日の「蒋介石日記」には、「某との接触については、毛沢東の共産党に対する華ソ双方の共同計画をた

てるのに責任をもてる人物を彼らが派遣することがまず必要だ。それ以外については、その次でよく、急ぐことではない」としている。蔣介石はルイスを交渉担当というよりもメッセンジャーと見ていたのであろう。また、「華ソ間の利害関係については、決して普通の外交関係というわけではなく、試し期間を経なければならぬ」というように相手側への警戒心、慎重さものをぞかせる。そして、「今後問題は、実質的な双方の行動と必要であるか否かによって決定する」としている。さらに、「相手側の行動をいかに見るかについて、我々にとって総理以来のソ連に対する宗旨は首尾一貫している」というようにソ連との連携の可能性も示唆している。

十月二十六日は土曜日であり、蔣介石は週末ごとに記している一週間の反省たる「上星期反省録」にてルイス関連のことに多く触れている。それは「ロシアの密偵に対する方針と答案」という部分であり、全部で十項目から成る。

(甲) 中ソ友好同盟相互援助条約が破棄されるより前には、我が国の対内外関係に関し、決してソ連との往來や貿易を公開してはならない。

(乙) 我が空軍の力量が不足しており、上陸して毛沢東側に相對することができないし、また中共の側には中距離ミサイルや核兵器の基地があるのに、それらを破壊する方法がない。

(丙) アメリカは始終我々が毛沢東に反攻していくのを妨害していた。従って、アメリカは有効な空軍を以て我々を支援するということに応じないだろう。

(丁) アメリカは常に毛匪と国交を密かに結ぼうとし、自分をこの孤島に凍結させている。その意図はどこにあるのか。

(戊) 我々が中国大陸の重要な拠点を占領するより前には、アメリカの海軍、空軍の統制から離れることもできないし、またソ連と公開的に貿易することもできない。我が国は孤島に位置しており、容易に他者に封鎖され、また容易に中共側の空軍とミサイルによって滅ぼされる。

(己) 毛沢東の死後、第二世代の中共がソ連と誠意をもって協力する可能性の有無、またソ連とともに覇を唱えないかどうかについて、彼に問う。

(庚) 中国は大陸国家であつて、その近隣の大国とは和平関係になければならない。

(辛) 我が国が大陸反攻をおこなうとして、もしソ連の同情、諒解と協力が得られなければ、容易には成功しない。

(壬) ソ連に人員の派遣を求める。

(癸) 共同して毛沢東を倒す計画をどのようにするか。現在こそ、毛沢東を倒すのに最も容易な時であり、こ

の機会を誤ってはならない。また、華ソ双方が再び協力する良い機会である。

この反省録には蒋介石の思考の揺らぎが見て取れる。大陸反攻という目標は揺らぎなく、また現在が最高の機会であるものの、アメリカはそれを支援してくれない。そのため、ソ連と協力する以外にない。しかし、それを公開でおこなうわけにもいかなないし、歴史的経緯からしてもソ連を十分に信用できるわけでもない、ということだろう。だからこそ、さらなる使節の派遣をソ連に求めるということになるのである。また、ここで中華人民共和国のミサイルの脅威が強調されていることも重要だ。このころ中華人民共和国はミサイル配備を強化しており、それが新たな脅威になっていたのである。³³

十月二十七日の日記には、これ以後も現れるフレーズが記されている。蒋介石なりに一つの判断を下したということだろうか。それは、「ソ連と親しむということであれば容共となることはできず、容共ということであればソ連と親しむことはできない」というフレーズである。³⁴ここでの「容共」は、中国共産党を受け入れることを指すと思われる。これば一九二〇年代の「連ソ容共」（中国語では「聯俄容共」）を意識したものであり、一九六八年では「親ソ不容共」「容共不親ソ」の可能性しかなく、結局前者になるとしているのだと思われる。蒋介石はこの日も、「ソ連

に対するさまざまな要因を考慮」し、「経国に対して某使と話すポイントについて指示した」。

十月二十九日、蔣経国とルイスが会見した。蒋介石は十日の日記で、経国から報告を受けたことを記し、「経国と某使との談話の経過の要点を聞いた。だいたい自分が考えていたのと同じであった。それへの応答について指示した」とあり、また「湖のほとりの家に戻って休み、目を覚ましてから最後の指示となる某使への回答について考えた」とある。³⁵その翌日の三十一日、ルイスは台湾を離れた。

その週の週末、蒋介石は「上月反省録（先月の反省録）や「上星期反省録」（先週の反省録）」でこの問題に触れている。前者では、「（いわゆる国共合作）中共の問題」、「（いわゆる中ソ友好条約）過去の条約問題」、「タイムスケジュールの問題」、「大使会談問題」、「インテリジェンス協力と反毛沢東の共産党員を我々のために活用していくという提案について」などと論点が列挙されている。最後の点は、ルイスから提案があったものと思われる、中国共産党内での反毛沢東勢力と蒋介石とが結びつくことを示していた。³⁶

後者の記述は、歴史的、地政学的なものである。ルイスに対して言うべきこととして、ソ連の過去の対華政策と行動の過ちについて批判するであるとか、ソ連側の中国側への視線が以前のスターリン時代と変わらないといったこと

があるものの、また一方で「中華民族の民族性と文化伝統」として、「以德報徳」とともに「以德報怨」もあるとして、ロシアを受け入れる可能性も示す。そして結論部には、「今後、中ソが再び協力するか否かについては、ただ二つのフリーズがキーワードとなる。これは断言してはいだろ。『もし我に容共せよというのなら、ソ連に親しむ方法はなく、またもし我にソ連に親しめというのなら、容共となる方法はない』⁽³⁷⁾。ここでも「容共」の「共」は中国共産党を指していると思われる。

三 ルイス離台後の動向

一九六八年十一月、ルイスはすでに台湾を離れているというのに、蒋介石は引き続きソ連との関係構築を検討し続けた⁽³⁸⁾。四日にも蔣経国からルイスとの話の状況を聞き、五日にはルイスについてソ連の情報関係の人間であろうと推測したり、「一、ソビエト共産党内にはまだ毛沢東シンパがいる。…四、反毛沢東派による中国共産党の組織との協力（運用）」などと記している。蒋介石は、中国に反毛沢東派による新たな中国共産党が組織され、その新共産党との間で国共合作を実現することを、疑念を抱きながらも考慮し始めていた。また、このほかにも「五、新疆で政権を組織する意図」などというように、大陸反攻構想はさ

らに膨らんでいたが、同時にこの計画が「失敗した場合、東アジア全体が毛沢東の手に落ちることになる」ということも考慮していた⁽⁴¹⁾。

十一月二十日、蒋介石は「ソビエト共産党がすでに設けた中国の「新共産党」と我と一致して毛沢東に対して反攻させるという陰謀」について研究を加えるようにと述べている⁽⁴²⁾。そこでは、「(甲)新共産党は軍隊を組織できない、(乙)あらゆる場所であれ政府という形態をとることはできない、(丙)その新政党がもし組織をつくるなら政府に対して登記して許可をえなければいけない、(丁)もしその政党が宣伝をおこなうならば、政府がすでに頒布している法令を遵守しなければならない」などが、研究すべき論点として挙げられている。同日の日記にはさらに、「今後、もし新中国共産党がこちらと共同して反毛沢東戦線をなすことを認めるのなら、一九二四年の時とは異なり、わが党にはすでに四十五年の経験があり、ソ連の陰謀を察することができている」として、二度と同じ轍は踏まないと述べている。ソ連側の意図は察知しながらも、それでもソ連を利用できないかと考えているのである⁽⁴³⁾。

だが、蒋介石はアメリカのことも信じられなかった。一九六八年末の「総反省録」にはそれが明確に示されている。「本年度、アメリカはその盟邦を売った。中華民國は特にそれを恨みに思っているし、我が外交上最も危険な一

年であった。アメリカ政府は信を失し、義もない。決して頼りにしてはならない⁽⁴⁴⁾。とはいえ、歴史的経験から蒋介石はソ連も直ちに信じることはできなかった。「ソ連のルイスの訪台以後、華ソ関係はよくなったであろうか。特に、ソ連の対中侵略の伝統、陰謀は徹底的に改まったと言えるのだろうか。その点は予測することはできない。その将来の対華の利害、損得の行方、そして禍福もみな予測できない」としながらも、この二十年のうちでソ連が中華民国に与えた機会として評価しようとする心情もあつた⁽⁴⁵⁾。

中華民国に対するソ連のアプローチは、ビクター・ルイスだけがしていたわけではない。ニューヨークでおこなわれていた、中華民国駐国連軍事代表団の王淑銘に対するソ連陸軍のフェドロフからの接触もその一つであつた。しかし、蒋介石はそれにあまり強い関心は示さなかつた⁽⁴⁶⁾。だが、蒋介石はソ連との連絡維持を考えていた⁽⁴⁷⁾。それは、蒋介石にとつての最大の政策目標である大陸反攻とこのソ連要因が深く関わっていたからである。蒋介石は、「光復大陸」の基本条件として、中華民国自身の条件、中国大陸側の条件（混乱内鬪、崩壊自滅）、友邦国家の政策と世界形勢、「半友半敵」である存在の利害得失などを挙げた⁽⁴⁸⁾。二月にはいると、アメリカのAP社がルイスの訪台の様を伝えたが、蒋介石はそれをソ連による宣伝だとしながらも、だからといってそれは自らに不利にはならないと

述べ、その内容に不満を顕にはしなかつた。特に、その内容の中で中華民国を独立国家として認められた点について、中華民国が「アメリカの附庸」とは見なされていないとし、中華民国の印象についても肯定的で、台湾を「軍営」とはしていない点にも注目し、「これはソ連が継続して我々と連絡協商していくことを示しているのか」などと記していた⁽⁴⁹⁾。

三月二日、ダマンスキー島事件が発生するが、その日蒋介石は「アメリカへの警告」として、「台湾を凍結するという政策は絶対に通るものではない。そんなことをすれば最終的に匪（中国共産党）に攻め込まれて占領され、世界に害を与えるだけだ」と述べている⁽⁵⁰⁾。

四月十三日、楊天石が「四条原則」としているソ連と協力して共産党政権と戦う条件を、蒋介石は日記で提示した⁽⁵¹⁾。

甲…無条件の互恵互諒の下で進行すること。

乙…相互内政不干渉。

丙…各党派は我々の領導の下で、我々の指揮と工作を受け入れ、わが政府の統一的な命令に行動すること。

丁…ソ連は（中華民国の）中央政府だけを援助し、その他の党派を援助してはならない。

（子）いかなる方法をもつても政府や軍隊を自ら組織してはならない。

(丑) 自由に宣伝をおこなってはならない。

(寅) いかなる外国からの援助も得てはならない。⁽⁵³⁾

ここで各党派としているのは、中国に新共産党を設けて、それと新たな国共合作をおこなうことを視野に入れてのことと思われる。翌日、蒋介石はソ連情報五点を検討しているが、それはソ連共産党および共産主義陣営向けの宣伝であり、また国民党と協力して毛沢東と敵対する意義を説明したり、あるいは中華民国とアメリカとの間の関係について挑発したりするものだとしている。⁽⁵⁴⁾ 蒋介石は、ソ連のこうした宣伝にも敏感に反応していた。四月二十日にも蔣経国と「ルイス問題とソビエト共産党の問題についての宣伝資料の分析」をおこなったとある。⁽⁵⁵⁾

四月二十二日、蒋介石は一つの決断を下す。それは、「ソ連に対して新中共という名義をつかった協力をおこなうことはできない五つの理由を説明する。ただし、ソ連との協力には反対しない」ということであった。⁽⁵⁶⁾ その翌日の日記はアメリカ側の反応が記されている。「ソ連と我が国との間に発生している関係について、アメリカとしては、反対はしないが賛成もしないとアメリカ大使が述べたという」、「アメリカ側は反対などできないことをよく知っているからこそ、このように言ったのだろうが、その目的は最後の『賛成もしない』というところにあり、将来ソ連との協力を阻止するための布石にしたいのだろう」と記して

いる。⁽⁵⁷⁾ グマンスキー島事件の後、中華人民共和国はソ連からの脅威の下で対米接近を検討し、アメリカもまた北京との関係改善を模索し始めていた。蒋介石はアメリカの動向について次のように述べている。⁽⁵⁸⁾

アメリカの対華政策はもっぱら匪共との妥協、ならびに我々を台湾に凍結して動けなくすることにある。そうすることで、二つの中国、または一つの中国、一つの台湾にするという目的を達成しようとしている。あるいは、わが政府を何かしらの条件をつけて売り、匪共の統一という目的を満足させようとするということさえありえるだろう。

蒋介石はアメリカの支援に基づく大陸反攻に絶望していたのである。

五月になると再びルイスから中華民国への接触が始まる。欧州にいたルイスが魏景蒙に連絡を取り、はじめ訪台をほのめかしたものの、最終的にはウイーンで魏と会うことになった。蒋介石は五日に魏の訪欧を認め、六日、七日に魏とルイスとの会見要領の作成を急いだ。⁽⁵⁹⁾ 他方、「魏景蒙日記」によれば、五日に西ドイツからソ連に関する情報として、ソビエト内部でペトロ・シエレストやアレクサンデル・シエレピンらから、⁽⁶⁰⁾ 中華民国、あるいは国民党との協力を重視する見解が提出され、中国に親ソの新共産党をつくり、国民党と協力させるといふ案が提案されたとの

情報が台北に伝えられていた。⁽⁶¹⁾この五日には蒋介石は蔣經国、魏景蒙と会い、対策を講じたのだが、その時にも蒋介石は新共産党との協力は想定しなかった。「歴史上すでに失敗し、その結果甲乙〔華ソ〕双方に極めて大きな禍いをもたらした、いわゆる国共合作の政策を採用することはできない」とし、さらに「いかなる形態であれ共産党という名をもちれば中国人民の恐怖、恨みや反対を招くだけでなく、毛沢東の共産党内における反毛沢東分子からも抵抗されることになってしまいうだろう」としている。中国国内に対しては、「毛政権内の各部門の反毛分子を吸収する政策を進めるべく、政治的には中華民国の領導の下に反毛救国連合戦線を組織し、全国の各党派の人々が共同して討毛復国戦争に参加できるようにする」とした。⁽⁶²⁾

蒋介石はソ連関連のさまざまな情報に接し、困惑しながらも、ルイスからの会見要望の強さなどから見て、「ソ連の匪との決裂政策はほぼ定まったようだ」などと述べ、交渉に前向きな姿勢も示していた。⁽⁶³⁾同日、オーストリアでは魏景蒙とルイスが会談を開いたが、中華民国側が策定した協力条件については議論されず、ルイス側はむしろ軍事情報交換であるとか、また中華民国がソ連から購入する武器のリストを提出するように求めたのであった。⁽⁶⁴⁾

ルイスと魏の会談内容は台北に伝えられた。それはまずソ連が新疆侵略のために中華民国を利用しようとしている

ことを指摘したうえで、「乙。両国の今後の協力共存の政策を重視していない。簡単に言えば誠意がなく、簡単にいえば我々を弄んでいる。丙。その最後の目的は、新たな中国共産党をつくり、それに中国を取めさせることである。武器を以て我々を誘うのが彼らの唯一の手段であるが、誠意のない支援方法である」としてソ連を批判する内容であった。⁽⁶⁵⁾

その二日後、蒋介石はすでに武器リストを提出しないことに決めていた。またソ連側の代表の訪華の可能性についてルイスが否定しながらも、「交通手段がないとか、仮名を使って出国できない」などと派遣できない理由を述べたことについて、蒋介石はまず批判を加え、さらにソ連が「政治と原則の談判を重んじていない」などと、その対中政策について「我々を基本的な対象とはみなしていない」と断じたのだった。⁽⁶⁶⁾そのような観点は「上月反省録」でも繰り返されたのだが、しかしソ連が中華民国をそのようなに見ていることについては、「奇とするには十分でない」とし、むしろ重要なのは両国が相手をいかに利用するかである、としている。また蒋介石は、ポドゴルヌイの北朝鮮、モンゴル訪問、またコスイギンのパキスタン訪問と、ルイスの中華民国との接近のタイミングが重なっていることから、「その討匪の全体の計画を知ることができ」⁽⁶⁷⁾などともしている。

六月十六日、蔣介石は次回の会議に向け、必要な武器リストを提出することについて検討を加えている。そこでは、ソ連が武器を台湾に供給する際に全てを台湾に運んでから戦地に運ぶのではなく、武器を中華民国国軍の中国大陸での上陸地点付近に送ることを考えているようだときれ、またソ連の基地を利用して大陸反攻をおこなうならば、それを具体的にいかにおこなうのか、などといったことが論点にあげられている。⁽⁸⁸⁾ 蔣介石は最終的に海軍、空軍面での支援をソ連に期待するようになるのだが、なおもソ連の誠意に疑念を有していた。

七月十五日、蔣介石は次のように述べる。⁽⁸⁹⁾

一、大陸領土主権を回復する問題について、ソビエト共産党がもし我々と先にその問題を解決できないというのなら、陽には我々と同意しているようでありながら、陰には誠意がないということである。そうならば、我々はソ連と協力するべきでない。そうしなければ、清の入関に際して、呉三桂や洪承疇が騙されたのと同じことになる。参考にすべきである。

楊天石は「蔣介石はこの時期、ソ連に対してなおも強い警戒心があった」としているが、前述のように蔣介石は常に「ソ連の誠意」を問題にしていた。⁽⁷⁰⁾ 他方で蔣は、「アメリカの誠意」はそもそも信じておらず、むしろアメリカには絶望していた。また、方法論の面では「国共合作」の面でソ

華は折りあえていなかった。

これ以後も、ルイスとの一定の交渉は続いていたが、一つの転機は一九六九年八月十三日の新疆の中ソ国境での軍事衝突であった。中ソ対立の激化によって、蔣介石はまさにソ連と中華民国との外交関係の回復の時期だとも感じるようになったのだが、この時期の蔣介石は中国の核兵器に注目するようになっていた。⁽⁷¹⁾ 「魏景蒙日記」には、九月二十日に蔣介石と蔣経国、そして魏との間でもたれた会合のことが記されている。ルイスの態度が友好的であることを大前提にして、以下の諸点が示された。第一に目下の国際状況を両国関係の発展の好機とみなし、ソ連側が人員を台湾に派遣して交渉をおこなえば、双方がいつそう協力できるとのこと。第二に、中国（中共）は核兵器を有しており、それがソ連と中華民国にとって共通の脅威となつているので、その脅威を徹底的に除く方法を協力して講じる。第三に、武力を用いなければ、毛政権が自壊するということとは考えられない。中華民国には十分に力を尽くせるが、海軍と空軍が不足しているので、ソ連側からの支援が必要となる。第四に、適当な条件の下で、中華民国側は外蒙古を正式に承認し、外交関係を樹立することを考慮する。⁽⁷²⁾

こうした点を踏まえて、蔣介石はルイスとの会談向けに九つの要点を提示した。それは歴史的経験に裏打ちされた

ものであった。第一に、先に中華民国側が提示したもののルイスが応じなかった五つの条件についての意見をソ連側
に求めること。第二に、孫文の三民主義は社会主義であり、民生主義は共産主義だとの認識に立ち、その親ソ政策
によつて三民主義に基づく建国をおこなおうとしたという
ことを認めたと、国民に害を与える毛沢東共産党は受け
入れないこと。第三に、中国共産党の党員で毛沢東に反対
する者が国民党に入ることは受け入れるが、彼らが別の組
織を作ること、二つの政党に属することも認めないこ
と。これはこれまでの国共合作を踏まえたものである。第
四に、中国共産党に別の組織がある場合、他の国内諸政党
と同様に国民党の領導の下に置くこと。第五に、もし武器
の必要性が議論になった場合、中華民国の提示した五条件
への回答を得た上で、正式に交渉をおこなうこと。中華民
国側の陸軍に問題はないが、海軍と空軍が不十分である。
第六に、外モンゴルについてその独立は承認するが、新疆
と東三省の主権と領土は譲れないこと。第七に、毛沢東と
いかに戦うかについては、双方で参謀団を組織し、協力し
て実施すること。第八に、討毛の行動は中華民国政府が単
独でそれをおこない、外国の参加は不要であること。第九
に、毛沢東共産党の核兵器の破壊については、ソ連側が武
器を提供して、中華民国側がそれを実行すること。この九
点に蔣経国の加えた三点を条件とし、魏がルイスに再び接

触することになった。^{②3}

十月一日の「蔣介石日記」には中国の核兵器の脅威に対
する具体的な対策が記される。それは、まず中国大陸側で
台湾海峡に面した地域に配されている近距離、中距離ミサ
イル基地を破壊し、その上で中国西北部の各施設と基地を
破壊することであった。^{②4} また、「上月反省録」では、ソ連
と関わる条件として、外交や内政面での不干渉を前提とし
た上で、中華民国として光復完成後にその国土を反ソの基
地にしないこと、またあらゆる国との間で反ソ条約を締結
しないこと、そしてソ連と隣接する諸省は経済的にソ連と
平等であり、相互扶助的な協力をおこなうことなどで
あった。^{②5}

しかし、十月二日にローマに到着した魏景蒙はルイスに
会うことはできなかった。その理由は直接的には定かでは
ないが、同日の日記には、ソ連の駐ブラジル大使であるセル
ゲイ・ミハイロフ (Sergey Mikhaylov) から中華民国の沈怡
大使に伝えられたことと、それへのコメントが記されてい
る。蔣介石は、その伝達内容について、ソ連が西ドイツを
承認しているという前例に鑑みて中華民国と国交を結ぼう
ということだとみなし、「その一。ソ連は西ドイツを承認
してもなお東ドイツの共産政権を保護している」と疑義を
呈し、「その三。わが政府の力を利用して毛共を消滅させ
るか、あるいはソ連の傀儡の中共を別に組織するつもりだ

ろう。その四。我々がソ連と復交するとしてもそれは反攻に有利だからであって、ほかの国家に対して二つの中国を承認させることはできない」などと述べた。⁽⁷⁶⁾ソ連を疑いながらも、まだソ連を利用しようとしていたのだが、「一つの中国」という大原則は変えられないというのである。

十月九日、蔣経国は帰国した魏景蒙と会い、ルイスと会えなかったことについて報告を受け、翌十日にそれを蔣介石に報告した。この時、蔣介石はソ連が約束を破ったことは想定内とし、また蔣経国の判断として「これは匪（中国共産党）ソの政策が変わった」ためだということを書いた。⁽⁷⁷⁾このことは同週の反省録でも改めて記され「ルイスが約束を蹴って景蒙に会わなかったことは別に奇異ではない」とし、さらに「共匪はソ連共産党の外交副部長が約束をして辺境問題について話し合うことを七日に宣布したが、ソ連共産党はこのことを知らないとはじめは言い、のちになって庫茨達庭夫（不詳）を代表として派遣し、北平で話し合わせると言った。これこそルイスが約束を破った原因である」としている。

実際、コスイギン首相がホーチミンの葬儀に参列した後、九月十一日に北京に降り立ち、周恩来と北京空港で会談をおこなっており、それによって中ソ間の緊張は緩和されていたのだった。ルイスと中華民国との間の接触はその後も続けられるが、一九六九年の中ソ関係が緊張した際がひ

とつの重要な機会であった。紙幅の関係で、以後の状況は別稿に譲るが、以上述べてきたルイスをめぐる状況、中華民国とソ連側との接触と交渉の経緯に、中華民国から見た文化大革命の一端が示されていたと思われる。

おわりに

本稿では、「中華民国（台湾）から見た文化大革命」に関する一側面としてビクター・ルイスと中華民国側の交渉過程を、主に「蔣介石日記」や「魏景蒙日記」などを用いながら叙述した。すでに一連の先行研究で記されている事実とともに、先行研究で用いられていない史料なども検討の対象とした。

これらの検討から以下の諸点が導かれたであろう。第一に、中華民国にとり、文化大革命は大陸反攻の格好の好機と捉えられていたことである。文化大革命によって中国大陸は混乱に陥っており、それこそ蔣介石から見れば長年の政策である大陸反攻実現の好機であった。第二に、その大陸反攻を阻んでいるのはアメリカであると蔣介石がみなしていたことである。アメリカは台湾海峡の維持を政策としていたが、中華民国の大陸反攻を支持してはいなかった。そのために、台湾にある中華民国が危機に陥る台湾海峡危機の際にはアメリカが中華民国を防衛することになるが

(金門、馬祖は米華相互防衛条約対象外)、アメリカは蔣介石の大陸反攻をも抑止していた。第三に、この好機に中華民国を助けうる存在として、同じく中華人民共和国と対立をするソ連が考慮の対象となっていたということである。

中ソ対立が激化していったこの時期、中華人民共和国はアメリカへの接近を決断するが、同時にソ連と中華民国との接近も一定程度はかられていたのである。蔣介石にとつて、「冷戦」、あるいは「資本主義と社会主義との対立」ということは、大陸反攻を果たして「祖国統一」を実現することの後景にあることであり、国是はまさに大陸反攻のほうにあったと見ることができるだろう。第四に、ソ連との関係性においては、歴史的な経緯、すなわち一九二四年のいわゆる第一次国共合作であるとか、『蘇俄在中國』に記されるソ連の中国への野心などが踏まえられつつ、同時に孫文以来の「連ソ容共」をも参照し、注意深く協力の可能性を見守っていた、ということである。「蔣介石日記」では、国民党は社会主義の政党であるとか、三民主義の民生は共産主義だといったことも記されるなど、冷戦下に反共国家とされる中華民国像とは異なる国家、政府、党の像が描かれていた。中国の文化大革命、また中ソ対立はこのような新たな化学反応を中華民国に与えていたのである。

今後、「蔣経国日記」などが公開されることでこの案件に関する実証研究が進むことであろうが、文革を中華民国か

らとらえることで、冷戦期の東アジアの歴史の多様性や複雑性が浮かび上がるということを最後に指摘しておきたい。

〔付記〕 本稿は、筆者が二〇〇九年九月二十三日にワシントン

の Woodrow Wilson Center for Scholars でおこなった報告⁵⁸「Soviet-Taiwanese Relations During the Early Cold War」の内容を基にしての (https://www.wilsoncenter.org/event/soviet-taiwanese-relations-during-the-early-cold-war 二〇一七年十一月十日アクセス)。

注

〈1〉 中国で文化大革命が発生し、国内が混乱したことは、中華民国が中国の正統政府としての正当性を主張する好機と考えられた。台湾内部では中華文化復興運動が展開され、また対外的にも華僑向けなどに多くの宣伝工作が実施された。この点に対する昨今の成果として、菅野敦志「台湾から見た文化大革命——中華文化復興運動を中心に」(『中国 社会と文化』三十二号、二〇一七年) がある。

〈2〉 「上星期反省録」(「蔣介石日記」(Chiang Kai-shek Diary) 一九六八年十月二十六日の後の反省録、スタンフォード大学フーバー・アーカイブ所蔵、以下略)。

〈3〉 松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』(慶應義塾大学出版会、二〇〇六年)、佐橋亮『共存の模索——

アメリカと「二つの中国」の冷戦史』（勁草書房、二〇一

五年）、前田直樹「第一次台湾海峡危機とアイゼンハワー政権——危機処理をめぐる米台摩擦」（『廣島法學』十八巻四号、一九九五年三月）などを参照。

〈4〉「上星期反省録」（蔣介石日記）一九六八年十月十九日の後の反省録。「十月二十日に記した」との記述あり。

〈5〉ビクター・ルイスについては西側の国の新聞記者をしていたソ連人であるとか、KGB出身であるとかいったことが同時代的に指摘されている。日本語の文献として以下を参照。佐久間邦夫「ビクター・ルイスという男」（『アジア経済旬報』九五〇号、一九七四年十月中旬号）、壬ひろし「などの男、ビクター・ルイス」（『大陸問題』二二三号、一九六九年十月）。

〈9〉John Garver, “Taiwan’s Russian Option: Image and Reality,” *Asian Survey*, Vol. 18, No. 7, July 1978. Michael Share, “From Ideological Foe to Uncertain Friend: Soviet Relations with Taiwan, 1943–82,” *Cold War History*, Vol. 3, No. 2, January 2003. Czesław Tublewicz, “Taiwan and the Soviet Union during the Cold War,” *Communist and Post-communist Studies*, Vol. 38, 2005. “Taiwan and the Soviet Union during the Cold War: Enemies or Ambiguous Friends?,” *Cold War History*, Vol. 5, No. 1, February 2005. “The Baltic States in Taiwan’s Post-Cold War ‘Flexible Diplomacy’,” *Europe-Asia Studies*, Vol. 54, No. 5, July 2002. “The Little Dragon and the Bear: Russian-Taiwanese Relations in the Post-Cold War Period,” *The Russian Review*,

Vol. 61, No. 2, April 2002.

〈7〉聯合報社編『蘇聯特務在台湾——魏景蒙日記中的王平檔案』（聯經出版社、一九九五年）。ただし、日記原本は James Wei diary とし Hoover Institution Archives に所蔵されている。

〈8〉「文史大講堂第一期——楊天石講你不知道的蔣介石」（人民網、二〇一〇年十月二十九日、<http://culture.people.com.cn/GB/70968/70970/13082388.html>）。

〈9〉楊天石「蔣介石聯合蘇聯、謀劃反攻大陸始末」（『江淮文史』二〇一四年第四期）など。この一文は、楊天石『搜尋真实的蔣介石——蔣介石日記解讀』（香港三聯書店、二〇〇八年）の該当部分の内容とほぼ同内容である。

〈10〉たとえば昨今の成果として Zhang Jianhua, “The ‘Taiwan Issue’ and ‘Taiwan Factor’ in Sino-Soviet Relations: And Explanation Based on Russian Sources, in George Wei eds., *China-Taiwan Relations in a Global Context: Taiwan’s Foreign Policy and Relations*, Routledge Contemporary China Series, Routledge, 2015. 中国語の論考として、林孝庭「沙裡淘金——從胡仏檔案重溫東亞冷戰史」（『国史研究通訊』第九期、二〇一五年）がある。

〈11〉福田円『中国外交と台湾——二つの中国』原則の起源』（慶應義塾大学出版会、二〇一三年）。

〈12〉この事件については、国史館所蔵の幾つかの文書がある。たとえば、「国防部総政治部主任蔣経国參觀陶甫斯号油輪」（蔣経国總統文物、005-030203-00004-006）、「外交

部政務次長兼代部長沈昌煥與美国駐華大使藍欽会谈有關陶甫斯号俄国油輪船員声請庇護要求赴美国已獲允允及反攻大陸之疑懼等談話紀錄」(蔣経国總統文物 005-010205-00080-016)など。当時の国防部長たる蔣経国がこの案期の処理にあつてゐた。なお、この事件も含めて、この時期の中華民国の周辺海域の外国船拿捕(ボーラント船など)については、以下を参照。林宏一「封鎖大陸沿海——中華民国政府「関閉政策」1949-1961」(国立政治大学歴史学系碩士論文、二〇〇九年)。

<13> たつた、Shaohua Hu, "Assessing Russia's Role in Cross-Taiwan Strait Relations," *Issues & Studies*, No. 43-4, December, 2007. なお、同論文ではこの拿捕事件の発生を七月二十三日としてゐるが (p. 43) 六月の誤りである。

<14> 「一九五四年六月二十二日」(「蔣介石日記」)。

<15> 「一九五四年六月二十三日」(「蔣介石日記」)。

<16> 「上月反省録」(一九五四年六月末、「蔣介石日記」)。

<17> Sergey Vradny, "Russia's Unofficial Relations with Taiwan," in Iwashita Akihiro eds, *Eager Eyes Fixed on Eurasia: Russia and Its Eastern Edges, Slavic Eurasian Studies*, No. 16-2, 2007, p. 221. ただし、本論文がタンカーを拿捕したのを中華民国の coast guard としてゐるのは海軍(二隻の駆逐艦)の誤りである(同頁)。

<18> "Memorandum of Telephone Conversation, prepared in the White House," June 16, 1954, from *FRUS*, Vol. XIV, part 1 (1952-1954), pp. 472-474.

<19> John Garver, *op. cit.* 以下に述べた観点は、一九五四年六月二十二日のランキン駐華(台北)大使から国務省宛電報の「Another general assumption will be that President Chiang would never order such seizure unless information relocation had come through US official channels (presumably ALUSNA Taipei) with consequent implication that US approved interception.」と述べた内容からも導かれる。「The Ambassador in the Republic of China (Rankin) to the Department of State,」961.53/6-2254; Telegram, No. 222, Taipei, June 22, 1954-5 p.m. (<https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1952-54r14p1/d222>), *FRUS*, 1952-1954, vol. XIV, pp. 480-481.

<20> 楊天石前掲論文、三七頁。

<21> ルイスについては幾つかの伝記があるが、さしあたり以下のものを参照。Jeanne Vronskaya, "Obituary: Viktor Louis," *Independents*, Monday 20 July 1992 (<https://www.independent.co.uk/news/people/obituary-viktor-louis-1534573.html>).

<22> 「(一九六八年)十月五日」「十月十六日」(「蔣介石日記」)。

<23> 「(一九六八年)十月十七日」(「蔣介石日記」)。

<24> 「上星期反省録」(「蔣介石日記」一九六八年十月十九日(後の反省録))。「十月二十日に記した」との記述あり。

<25> 「(一九六八年)十月二十三日」(「蔣介石日記」)。

<26> 「(一九六八年)十月二十四日」(「蔣介石日記」)「ただ

し楊論文では「一」「二」……となっているが、日記原文では「甲」「乙」……となっている。また、日記の内容の直接的引用ではなく、しばしば意識されている（「我党」を「国民党」とするなど）。これは、楊天石前掲『找尋真實的蔣介石』（二五四頁）でも同様である。出版に際して「蔣介石日記」と全く同じ内容をそのまま記すことについての問題が発生したので、部分的に修正を施した可能性も考えられる。

〈27〉（一九六八年）十月二十五日（「蔣介石日記」）。

〈28〉（一九六八年）十月二十五日（「魏景蒙日記」、聯合報社編前掲『蘇聯特務在台湾』所収、以下略）。なお、「王平」というのは魏の偽名である。

〈29〉 同右。

〈30〉（一九六八年）十月二十六日（「魏景蒙日記」）。

〈31〉（一九六八年）十月二十六日（「蔣介石日記」）。この日の日記の内容を、楊天石前掲論文はやや簡略化して引用している。

〈32〉「上星期反省録」（一九六八年）十月二十六日」の次の記述。「蔣介石日記」。この部分の楊天石前掲論文の引用はかなり簡略化している。

〈33〉一九六六年七月、いわゆる第二砲兵が組織され、間もなく東風二型の配備が始まった。

〈34〉（一九六八年）十月二十七日（「蔣介石日記」）。この日から、ソ連について「俄」から「蘇」に変化している。

〈35〉（一九六八年）十月三十日（「蔣介石日記」）。「湖

とあるのは、おそらく台湾の大溪の慈湖のこと。この地が故郷の浙江省奉化県溪口の光景に似ていたことから、蔣介石はこの湖を慈湖と名付け、そのほとりに庵を建てて、頻繁に訪れていた。

〈36〉「上月反省録」（先月の反省録）（一九六八年）十月の月末。「蔣介石日記」。

〈37〉「上週反省録」（先週の反省録）（一九六八年）十一月の冒頭。「蔣介石日記」。

〈38〉ルイスという人物についても、「ソビエト共産党の国際情報員であつて、疑いが無い」とも記している（一九六八年）十一月二十九日、「蔣介石日記」。

〈39〉（一九六八年）十一月四日（「蔣介石日記」）。

〈40〉（一九六八年）十一月五日（「蔣介石日記」）。

〈41〉「上週反省録」（一九六八年）十一月九日」の後。「蔣介石日記」。

〈42〉（一九六八年）十一月二十日（「蔣介石日記」）。

〈43〉十二月十四日の日記では、タス通信がルイスの訪華のことだけでなく、中華民国から記者がソ連を訪問することを約したとも報じているとし、それが挑発であり、また偽造報道だと断じた上で、ソ連側の意図に注意すべきだと述べている。（一九六八年）十二月十四日（「蔣介石日記」）。

〈44〉「民国五十七年総反省録」（「蔣介石日記」）。

〈45〉（一九六九年）一月二十七日（「蔣介石日記」）。

〈46〉「また淑銘とソ連人の会話の情報に接する。なんの意味もない」などと記されている（一九六九年）一月九

- 日、「蒋介石日記」。
- <47> 「一九六九年」一月二十五日〔蒋介石日記〕。
- <48> 「一九六九年」一月二十二日〔蒋介石日記〕。楊天石前掲書は、こうした蒋介石の大陸反攻政策に関わる部分について詳細に引用、紹介していない。
- <49> 「戊」、「本星期反省録」(一九六九年)二月第一週。〔蒋介石日記〕。
- <50> 「一」、「本星期反省録」(一九六九年)二月第一週。〔蒋介石日記〕。
- <51> 「一九六九年」三月二日〔蒋介石日記〕。
- <52> 楊天石前掲書、三八〇頁。
- <53> 「一九六九年」四月十三日〔蒋介石日記〕。
- <54> 「一九六九年」四月十四日〔蒋介石日記〕。
- <55> 「一九六九年」四月二十日〔蒋介石日記〕。
- <56> 「一九六九年」四月二十二日〔蒋介石日記〕。
- <57> 「一九六九年」四月二十三日〔蒋介石日記〕。
- <58> 「上星期反省録」(一九六九年)五月第一週。〔蒋介石日記〕。
- <59> 「一九六九年」五月五日、六日、七日〔蒋介石日記〕。
- <60> Petro Shelest はウクライナ共産党幹部であり、Alexander Shelepin は当時KGB議長であった。
- <61> 「一九六九年」五月五日〔James Wei diary, Box 11, Hoover Institution Archives 所蔵〕。
- <62> 同右史料。
- <63> 「一九六九年」五月十四日〔蒋介石日記〕。

- <64> 「一九六九年」五月十五日〔James Wei diary, Box 11〕。
- <65> 「一九六九年」五月二十五日〔蒋介石日記〕。
- <66> 「一九六九年」五月二十七日〔蒋介石日記〕。
- <67> 「上月反省録」(一九六九年五月への反省録。〔蒋介石日記〕)。
- <68> 「一九六九年」六月十六日〔蒋介石日記〕。
- <69> 「一九六九年」七月十五日〔蒋介石日記〕。
- <70> 楊天石前掲書、三八三頁。
- <71> 「一九六九年」九月六日〔蒋介石日記〕。
- <72> 「一九六九年」九月二十日〔魏景蒙日記〕。
- <73> 同上史料。蔣経国が加えた三点は、この戦争が世界戦争に拡大することを望まないの、第三国の関与を求めないこと、またソ連は国民党の対毛沢東戦争を支援することに専念し、共産党の反毛沢東戦争を支援しないこと、そして国民党が全国路領導して討毛戦争をおこすにあたり、あらゆる反毛団体を受け入れること、であった。
- <74> 「一九六九年」十月一日〔蒋介石日記〕。
- <75> 「上星期反省録」(一九六九年九月分、蒋介石日記)。
- <76> 「一九六九年」十月三日〔蒋介石日記〕。
- <77> 「一九六九年」十月十日〔蒋介石日記〕。
- <78> 「本星期反省録」(今週の反省録)(十月十一日の後。〔蒋介石日記〕)。なお、中国共産党の十月七日の宣布とソ連の反応は、十月十日の『人民日報』に「蘇修不敢報道我國政府七日声明」として掲載されている。